

小規模校における児童生徒の社会性の育成について

1 社会性の定義について

(1) 広辞苑から

①ある社会に固有の性質

②集団をつくって生活しようとする人間の根本性質。本能的なものとする説が多い。
社交性

③社会全般に関連する性質

(2) 論文から

鶴宏史・安藤忠「社会・家族の変化と子どもの社会性発達」(2007 年)によると、定義については、研究者の間でも一致したものがなく、下記の三つの論文を検討した後、「このように見ていくなれば、社会性は、自己の確立および、対人関係(人間関係)に関する諸特性といえることができる。そして社会性は、出生からおおよそ成人になるまで(十代後半まで)に育まれ、子どもが成長するそれぞれの年齢で、家庭、地域、幼稚園・保育所、学校など、様々な場での人間関係と社会的な経験を通じて、発達するのであり、個人差も大きく、社会的変容の影響を受けながら世代から世代へ、社会集団から社会集団に受け継がれるものという特質を持つ。」と論述している。

①遠藤利彦「子どもに育てたい社会性とは何か」児童心理第 58 号第 2 号(2004 年)

「子どもが発達過程の中で備えるべき、あくまでも『社会』というものに限定的に関わる性質や能力」と定義している。

②繁多進「社会性の発達とは」繁多進他(編)『社会性の発達心理学』(1991 年)

最広義の定義としては、「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性」、最も狭い意味としては、「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」を指すと指摘する。そして自らは、「個人が自己を確立しつつ、人間社会の中でよりよく適応的に生きていく上での諸条件」と定義する。

③松永あけみ「子どもの社会性はどう発達するか」児童心理第 58 号第 2 号(2004 年)

「人が自分を確立しつつ、人間関係を形成したり、社会の規範や行動様式などを身につけるなど、その個人が生活する社会において、互いに、円滑かつ適応的に生きていく上で必要な諸特性」とし、その特性を 自己形成の要素(自他への信頼感および有能感、自己制御能力など)と、他者を捉え、関わるための要素(他者理解能力、役割取得能力、他者への共感性や思いやり、コミュニケーションスキル、社会的問題解決能力)に分けている。

2 社会性の育成等についての研究（下線は事務局により加筆）

- (1) 長崎 勤「子どもの社会性は育てられるか？ー社会性を捉える観点の検討と児童期のクラスでの社会的問題解決能力の発達から考えるー」（実践女子大学. 生活科学部紀要第 52 号. 2015）

クラスなどの一定の集団の中で、子どもたちがどのように社会性、また様々な問題を解決する能力（社会的問題解決能力）を発達させてゆくかについての研究は少ない。

- (2) 杉本 任士「児童期における社会性の発達と規範意識の形成」（日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No. 16. 2015）

児童期は、大人から自律し社会性を発達させていく時期であり、普遍的な価値観に基づく規範意識を形成していく時期である。

しかしながら、現代の日本社会では、核家族化や少子化の問題があり、かつてはギャング集団¹によって非意図的に培われてきた社会的スキルを学ぶ機会が失われてきている。また地域社会の機能の低下によって規範意識が醸成されにくい状況にある。

こうした問題を解決するには、これまでに増して学校教育の役割が重要となると考えられる。学校では、児童の社会性や規範意識を醸成するための様々な取り組みが行われている。しかし、それらの取り組みは、教師の指導のもとで、管理された環境の中で行われる。その場合、ギャング集団における子どもだけの自治的風土の中で、様々な葛藤場面に遭遇し、それを克服することによって社会性を獲得したり、規範意識を高めていったりすることは難しい。

また、新たなプログラムの開発には時間がかかるという問題がある。そして、現行のカリキュラムにはゆとりが少ないため、現状では新しい取り組みを導入するのは難しい。

恒吉(1992)は、日本の小学校には「かくれたカリキュラム」が存在していることを指摘している。例えば、給食当番や掃除当番などの当番活動は、日本独自の教育プログラムであり、子ども達はこうした当番活動の中で、集団行動を学び、協調的な行動を身に付けていく。

給食当番や掃除当番を効率的に行うという共通の目標を持つことによって、個別には当番をさばらず、まじめに行うという規範意識が求められる。また、友達と協調して当番を遂行しなければ上手くいかないという経験もする。こうした葛藤場面を利用していけば、児童の社会性の発達や規範意識の醸成にいくらか貢献することができるのではないだろうか。

今後は、「かくれたカリキュラム」の場面での社会性の発達や規範意識の醸成に関する具体的な研究が求められる。

- (3) 山口県総合教育支援センター「社会性を育む特色ある教育活動＜小学校の実践 地域が元気になる総合的な学習の時間＞」

小規模校に勤務している教員が集う研究協議の席で、必ず話題に上がるのが、少人数によるコミュニケーション不足の問題である。

人間が社会的な存在であることを考えれば、小規模校での人数の減少は、学校の統廃合に

¹ 小学校の2年生後半から3年生くらいになると、子どもはギャング集団を形成していく。ギャング集団とは、主に児童期において同性かつ同年齢の子どもで構成され、排他性・閉鎖性が強く、バッチ、合い言葉、掟のような固有の価値文化体系をもつ集団のことである。（同論文より抜粋）

つながる重要な問題である。私たち教員は、子どもの社会性の発達を阻害するものを、児童数のみで片付けてしまうのではなく、社会性を育む教育実践の内容そのものを吟味し、豊かなものにしていく必要がある。

- (4) 今在慶一郎「へき地の保護者と教員が抱く児童観：人間関係、コミュニケーションスキル、競争心について」（北海道教育大学、2011）

児童数 22 名の小規模校で教員、保護者に対して調査を行った。

【調査 1】

○小規模校の長所

教員の回答についてみると、児童にかかわることについては、豊かな自然の中で一人ひとりに活躍の機会が与えられやすく、素直で思いやりのある児童が育ちやすいという回答が見られた。

○小規模校の短所

保護者の回答についてみると、児童に関しては、交友関係が限定的で保護や支援を受けやすい環境で育つため社交性が育ちにくく視野が狭くなりやすいことを心配する様子がうかがわれる。

【調査 2】

調査 1 の結果を受け、Ⅰ.良好な人間関係、Ⅱ.コミュニケーションスキル、Ⅲ.「競争心」に関する質問、Ⅳ.人間関係や社会性に影響を与えられと思われる小規模校の特質についての質問を設定

Ⅳ. 人間関係や社会性に影響を与えられと思われる小規模校の特質

明確に系統だった回答はみられなかったが、保護者、教員の回答を通して、集団経験が少なくなるという否定的な回答が示された一方で、児童一人ひとりが尊重されやすいという肯定的な回答もみられた。また、教員の影響力が大きくなることを指摘した回答もあった。

- (5) 小松光恵「小規模校の児童の他者と関わる力を育てる研究（第一年次）－実態調査と教育相談の手法を生かした実践を通して－」（福島県教育センター）

学校教育法施行規則では小学校の標準学級数を 12～18 学級と定めているが、平成 27 年度現在、全国の小学校のおよそ半数がそれを下回っている。本県でも小学校 467 校中、標準学級数を下回る小規模小学校（以下、小規模校）は 295 校と全体の 6 割以上を占めており、そのうち統合の検討を要する 1 学年 1 学級以下の学校も 4 割に達している。これらの小規模校においては、児童同士の深い人間関係が築かれやすい一方、社会性やコミュニケーション能力等が育ちにくいといわれている。

小規模校に勤務した際の自分の指導を振り返ると、小規模校のよさや課題のとらえが曖昧で、身に付けさせたい力を明確にした支援ができなかったために、児童のコミュニケーション能力等を十分に向上させることができなかった。これらのことから、小規模校のよさを生かして、児童が他者によりよい関係を築いていけるようにするための手だてを講じる必要があると考えた。そこで、小規模校のよさを把握するために実態調査を行い、そのよさと教育相談の手法を生かした実践を通して、小規模校の児童の他者と関わる力を育てたいと考え、本主題を設定した。